

早いもので、今年も残すところ後わずかになりました。大掃除をして新年を迎える準備をすこしずつ始められていることと思います。来年こそ、マスクなど気にせず、わいわいとおしゃべりしたり、気兼ねなく接触した活動をしたり、子どもたちの健やかな成長を願って様々な教育活動ができるように、コロナの収束を心から願っています。



子どもの自律性や自信を損なう コミュニケーションのパターンとは・・・

子どもと話し合っているときに、子どもがキレる「引き金」になりやすいコミュニケーションのパターンがあります。親がアンガー状態になっていて、「自分の気持ち」と「何を伝えたいのか」の欲求が混在している場合に、このパターンを使いやすいようです。まず、NGパターンとその理由を説明し「本当のメッセージ」を伝える方法を紹介します。

①事実を決めつける・・・「～したんでしょ」「いつも～してる」



自分の主観で決めつけた言い方をすると、コミュニケーションが閉ざされてしまいます。その出来事は、子どもにとっては、けんかでないかもしれないし、「争いごと」の背景に何か事情があるかもしれないのに、「どうせ言い分は聞いてくれないんだ」と思うってしまうからです。

【Good 対応】子どもにとっての事実を客観的に聞いてみる

このときに役立つのが「何」「～について」など具体的に話してほしいことを指定する方法です。子どもは、主語を抜いたり、時系列が混乱したりすることが多いので、まずは、うなずきながら子どもの話を最後まで聞き切るようにしてみましょう。その後、図や文字にして整理するといいでしょう。



②自分の感情を相手に押しつける

・・・「恥ずかしいでしょ」「悔しいと思わないの？」

子どもの行動を恥ずかしい、悔しいと思っているのは大人の方で、子どもは違うかもしれません。そのため、主語が誰だかわかりにくい文を投げかけられると、子どもは、「親が怒っている」「恥ずかしいと思え、と責められている」と感じてしまいます。

〔Good 対応〕 自分の気持ちを伝えたいときは「私メッセージ」を使う

「ママは恥ずかしいな」「私は悔しいよ。だって、あなたが頑張っているのを見てたもの」のように、主語を自分にして話します。また、子どもの気持ちを聞きたいときは、「～は、嫌だった?」「悔しかった?」と問いかけてみましょう。はっきり答えられる質問の方が気持ちを整理しやすいからです。

③責めるような言い方をする・・・「何で?」「どうして?」



左のイラストのような言い方は、理由を聞いているのではなく責めているように捉えられがちです。こんな言い方をすると、子どもは黙ってしまい、何も言えなくなってしまいます。

〔Good 対応〕 事実を伝えて、背景を聞いてみる

理由を聞きたいときは、「～ということになっているね。」と事実を伝えた上で、「理由を話してほしい」と、どうしてそうなったかの背景を聞きましょう。



④物事を否定的に伝える・・・「それやっちゃだめ」「ここ違う」「～しないなら、～できなくなるよ」「今さら、やったって無駄よ」



行動制限をされたり、間違いをしてきされたりすると、自分を守るために攻撃的になりがちです。子どもからは、「うるさい」「関係ないだろう」と反発されやすくなります。また、「～できないよ」と否定的な結果を示されると、「頑張ってもだめなのだ」と自信を失い、努力することを諦めてしまいます。

〔Good 対応〕 できているところを認めた上で、修正する方法を一緒に考える

客観的に、できているところを認めた上で、これからどうすればいいかや、どこを直していけばいいかを、一緒に考えていくようにしましょう。



あと3つのNGパターンは、次号で紹介します。